



無知学は啓蒙主義の道筋を必ずしもたどらない

塚原, 東吾

(Citation)

化学, 79(9):26-27

(Issue Date)

2024-09-01

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本記事は出版社の許諾を得て公開しております。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495792>



無知学は啓蒙主義の 道筋を必ずしもたどらない

塚原 東吾

神戸大学大学院国際文化学研究科

無知を特定することの目的の「一つ」は、その無知をなんらかの新しい知で埋めるためである。それは科学の実践の基本であり、無知は特定されることによって研究のための資源にもなるという側面をもっている。だから無知には、単なる欠如や埋められるべき空白だということ以上の価値があり、無知学はこのような観点から無知を見ることを勧めている。だが、必ずしもそれが「すべて」ではない。

誤解してもらっては困るのだが、無知学では、すべての無知が新たな知で埋め尽くすことができるという想定はしていない。もしくは、どうやったら合理的に、そして手際よく、「無知」をなくしていくのかという技法やテクニックを目指しているわけでもない。そういうことは教育学の専売特許だし、科学コミュニケーションという分野だってある。無知学はそれらのお株を奪うことは意図しておらず、教育学や科学コミュニケーションには、友好的な伴走者であろうと努めている。

無知学と教育

日常的な実践において無知を検討することは、すでに長いこと取り組まれている。それは教育学であったり、科学コミュニケーションに期待される課題である。これらの分野が担っているのは、科学の内容をわかりやすくするために、初学者や非専門家の「無知」を探し当て、適切なトレーニングプログラムを用意して、必要な体系と順序を立ててそれを埋めていくことだ。それは日常性の維持や持続のためにとっても大切な分野である。科学者にも、その役割の一部を担うことが期待されているし、無知学も、そこになんらかのお手伝いのできればよいと考えている。

だが無知学のおもな役割は、教育学や科学コミュニケーションを手伝うことではない。社会性の維持や持続を目指すための啓蒙的な役割に貢献することにはやぶさかではないため、そのような分野に接近して友好的な態度を示しながらも、無知学は教育学や科学コミュニケーションに対して、「非

共感的」な立場を取ろうとしている。

ここで無知学と教育学や科学コミュニケーションとの違いをざっくり定義しておこう。教育学や科学コミュニケーションは、すでにある程度の広い了解を得た正しいとされる知識を広めることであり、その普及・伝達を目指すものだ。正しい訓導と陶冶が教育学の役割で、合議に資するための宣伝や広報を考えることや、科学の内容をわかりやすく伝えることが科学コミュニケーションの仕事だといえる。さらには、正当性をもつ教育やコミュニケーションの制度化を進めることや、それらの受容・適応についての研究が含まれると考えてよいだろう。

これに対して無知学は、そもそも広く正しいとされている認識を問題にしている。当然のことと想定されていることのなかにある誤りや思い込みを指摘すること、すでに権威をもつとされる知識や、普及や受容という概念自体に、無知の問題が含まれているのではないかということを指摘したり検討したりする。

思想史のことは使っていないなら、教育学や科学コミュニケーションは啓蒙の立場であり、無知学の立場は既存の知の構造や啓蒙に批判的な観点を設定したり、疑問を提出する立場である。

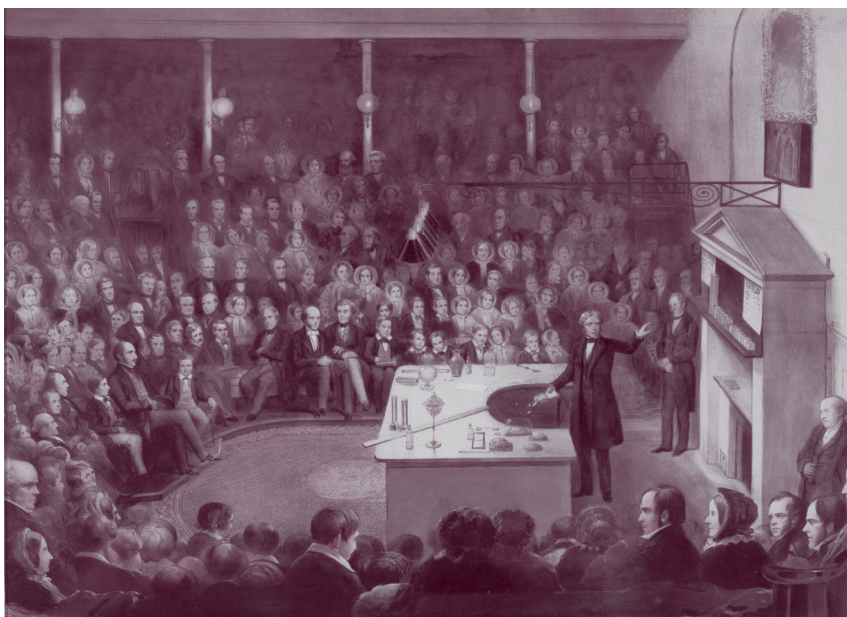
非共感的であること

つまり無知学が中心的に担うのは、そもそも知だと思われていることのなかに潜んでいる無知の存

在や役割、そして機能や作用を明らかにだすことである。だが、無知学が啓蒙に対して非共感的というのは、必ずしも敵対したり、抵抗的であることを意味しない。そのように取られたら、それこそ誤解であるから、そういう見方はしないでほしい。むしろ無知学は、教育学や科学コミュニケーションに対して、よき伴走者であることを目指している。非共感的に対象に近づき、そしてその対象のあり方を、少し違った角度から考えようとする、本人が気づかないことを横から気づかせることは、いうならば「哲学」や「思想」の本来の役割である。教育や啓蒙には非共感的であるとはいっても、ちゃんとしたリスペクトは払っていると考えているから、教育学や社会を維持する側にも微力ながら資するように振る舞っているつもりである。

無知学と啓「蒙」

そもそも啓蒙の問題は、誰が誰を啓蒙するのかという問題でもある。英語でいうなら啓蒙も啓発も、「光で照らしだす(enlightenment)」ということになる。じゃあ、その光をもって何かを照らしだすのは誰だろう。照らしだされる暗闇は「蒙」であって、一般には無知蒙昧の側にあるといわれているのだが、それはすでに先入観だろうし、差別的ではなかろうか。だから最近では啓蒙の「蒙」という字は使わないことになっている。たとえば「タバコやアヘンや覚醒剤には依存性が



無知学は、教育学や科学コミュニケーションとは違った角度(非共感的な立場)から対象に近づくことで、それらのよき伴走者であろうとする。

図：ファラデーのクリスマスレクチャー (PHOTO: Wikipedia).

あるし、健康被害をもたらすからヤメておきましょう」という教育的なキャンペーンやヘルスコミュニケーション活動などは、啓蒙ではなく、啓「発」活動ということになっている。

啓蒙に関しては誰が光で何を闇とされていたのかを考えなくてはならない。無知学の観点を取り入れるなら、誰が知識の側で、誰を無知の側と決めたのかということになる。またコミュニケーションと自称しているとしても、誰と誰がどのような関係性のもとで会おうのだろう。そして何を伝えるのか。啓蒙やコミュニケーションというのは、単なるツールや技法の問題ではない。知の権力性や正当

性・立場性をめぐる、きわめて政治的な課題でもある。無知学的にいうなら、さまざまな形態の無知や、ある面から切り取られた無知が、「教育的関係性」や「上から目線のコミュニケーション」の前提となっていることは注意しておかないといけない。

無知学は、そのような啓蒙主義の構造自体を考えてみようとする。もしくは啓蒙や啓発するということや、立場の違いを教育的で科学コミュニケーション的な関係性にもち込み、無知への知識勾配を均そうとすることに、いくばくかの周辺的な貢献は可能であったとしても、それは必ずしも無知学の中心的な役割ではない。

つかはら・とうご ● 神戸大学大学院国際文化学研究科教授、1987年東京学芸大学大学院修士課程修了、1993年医学博士 (Ph.D., オランダ・ライデン大学)、＜研究テーマ＞科学史、科学哲学、STS (蘭学、化学史、気候再現など)、＜趣味＞ブラタモリと孤独のグルメを合わせたような感じで行ったことのない街を歩くこと、淡水魚の水中観察